石段を登りて、甲午の紀念碑前に出ず、土手にスミレやタンポヽの花が咲いて居るものを見れば、故郷に在る心地す、若櫻芽を生へて花正に開かんとするもあり、早きは如何る譯なりしか散つたものあつた。

老松繁茂して水道噴水亦心地よく、清水を噴上げ、音樂堂あり春の遊山人の心を慰す、右手に舊統監府の赤壁見ゆ、又山内稻荷神社あり、眼を市街に轉ずれば一眸千里の如く、遠く光化門見え昌德宮見ゆ、市街をスケッチして、左側に新造されし漢陽公園に遊び、遠く龍山を眺め、歸りて頂上に登る、道小石にしてグザリ〳〵と下駄の氣持惡さ、谷をつたひ坂を辿り、老松茂る間を進めば溪流あり、人の聲聞ゆ、無名の家屋幽谷に有るを見て寫した。上より下山する人來る、見れば朝鮮婦人であつた。南山は一名倭城台と稱して、文祿役に小早川等の陣せし處故倭城台と名付けたのである、頂上に國分寺と云ふ尼寺ありて、附近大木散在す、域壁頂上廻りて遠く北漢山に到る、腰を林間に下して四方を眺めんか、正面に北漢山の劍峯聳え後方龍山の町は勿論兵營漢江の流東より西に走るを見、南漢山の峯其の他名知らぬ山々が浪々と連つて居る、漢江に浮ぶ白帆の愛らしさ、左方には南大門及驛見え、列車の黑煙を吐く樣手に取る如し、右は山又山で江原の峯も霞の中に消える、山上岩石多く城壁にも苔生へて、何んの音だも聞えぬ、實に神秘の極りである。尼寺を見れば、中に佛壇ありて佛像を安置す。

城壁は五百年前に造られ、雨にうたれ風にさらされ、松の梢と梢のすれ合ふ音を聞くより外は無聲である、僕はスケッチを忘れて城壁に涙を催した、而し我が涙は唯苔を肥したるばかり何の事があらうか。

日は西に廻つて林間は薄暗くなつた、走るか如く下山した、夕日の總督府の硝子窓に映ずる樣は、黃金を塗り付た樣であつた、坂を下りて明石警務總監邸前を通り、日の出町の小學校庭にて休み、後を振返れば、南山の中腹に舊統監邸の赤壁一入寂しく立つばかり。

やがて山も街も暮れて來た。

——（五月三日）——

御注意まで

兒島虎太郎

先日僕が函館より十里先の内浦灣附近へ寫生に出かけ、森驛で三脚を手に汽車を下りた迄はよいが、それより半里もテク〳〵やツて箱を下ろし、さて三脚を開かうとしたが、驚いたのは三脚の床皮がドロンをきめたに閉口した。それから元來た道を蚤取り眼で見たが遂に見當らず、又半里の道を元の面白い處に來た時、泣き面に蜂で雨が降り出し、寫生も出來ず、ぬれ鼠で三脚の捧を右手に森の例の宿へ歸つたら、番頭が西洋の犬殺しだと冷かした實に大失敗で有つた。但し、僕の三脚は十八世紀的で、今の三脚の樣に皮と脚とに糸を付ける鋺が付いて居ないのだ、十八世紀的三脚を御持ちの方へ、三脚の皮を失はぬ樣糸を付ける樣御注意まで。